不定期刊行　　第593号　2016.11.23

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町岳陽高等学校

「ウエストンが残した　クライマーズブック」

クライマーズブック刊行会編　信濃毎日新聞社刊

この夏の山の日、松本市上高地で行われた記念イベントの際に標記の本が配布された。松本市内では書店の店頭にも並んでいるので、読んだ方も多いだろう。日本アルプスの紹介者で、上高地のよき理解者でもあったW．ウェストンは1914年、生涯最後となる上高地逗留の際、宿泊先の上高地温泉場に一冊の日記帳を残した。その冒頭には、「上高地が既に登山の中心地として人気を集めつつある中、外国人登山者が関心を持ち、有益となるような記録を残す方法が必要であり、滞在客に山行のルートや時間、天候などを記してもらいたい」という趣旨の一文が書かれている。この日記帳にはその後、80名ほどの外国人が記録を書きつぎ、それは「KAMIKOCHI ONSENBA CLIMBERS' BOOK」の名で一部の研究者の間では知られていたものだったそうだ。

大正から昭和へ、第2次世界大戦をはさんで上高地を訪れた外国人がこの景勝地の何を見、魅せられたのかが書かれており、きわめて興味深い。とりわけ、興味深かったのは、1915年6月6日のＪ．M．ディヴィスという人の記述である。この日は焼岳が噴火した日である。まさにその日、清水屋に宿泊していた筆者の描写はその噴火の様子を生々しく伝えている。彼はその後10日間当地にとどまり筏をつくってできたばかりの大正池の探査までしているのだから驚きだ。・・・主に英国人を中心に書き継がれ、一番最後の記録の日付はなんと1972年。なんと60年近く読み継がれながら書き継がれたことになる。まさに知られざる上高地の貴重な記録である。本文が英語の本文との対訳になっているのも面白い。

「冒険登山のすすめ」　米山悟著　ちくまプリマー新書

高校生におすすめの一冊。「冒険登山」っていうのがいい。著者の米山さんは高校の後輩でもあるが、北大の山岳部を経て、現在はＮＨＫのカメラマンである。彼はイグルーづくりの名人でもあるが、そのことはかわらばん539号でも紹介したことがある。その米山さんがご自身の高校時代からの山遍歴を振り返りつつ、安全登山への道筋を高校生にもわかるように説いている。冒頭高校の後輩とあえて書いたのは、僕自身もお世話になった高校時代の恩師が本文の中に登場すると同時に、彼自身も書いているようにそのころの母校がいかに人を育てる学校だったかということにもいたく共感したからである。その点では、現に高校教師をしている自分にとって、刺激を与えてもらった。

それはともかく、前半は安全登山の一番の基本は読図であるとの考えに基づいて、地図を読んで計画書を立てることの重要性を述べ、自立した登山者とは何かを説いている。まさに我が意を得たりという思いであり、多くの高校生に読んでほしいと思った。

後半は氏を育ててくれたもう一つの北大山岳部流の山歩きの楽しみ方があますところなく書かれている。こちらはちょっと異質な部分もあるが、冒険ってなんだということを想像（イメージ）させてくれる創造的（クリエイティヴ）な内容だった。

第３回オリジナルマウンテンマラソンＩＮ大町

オリエンテーリング界では知らない人のいない村越真さん、田島利佳さん、小泉成行さんの3人から「大町でロゲイニングと山岳マラソン、アドベンチャーレースを複合したような大会を開きたいので、ご協力いただけませんか？」という依頼を受けたのは、ちょうど一年ほど前のことだった。当の競技については全くの素人、雲をつかむような話であったが、日ごろからお世話になっている村越さんからのお話、ＯＬにも全く興味がないわけでもない。持ち前の好奇心も相まって「お役に立てるなら」と来安く請け負った。その競技、OMM（オリジナルマウンテンマラソン）が先週、大町市を会場に開催された。今年になって改めてお願いされ、その大会規模にまずびっくり。なんと参加者は1000人という。なんでもOMMはイギリス発祥のスポーツだそうで、本家のイギリスではもう50年の歴史を持つ大会なのだとか。日本での開催は今年で3回目。

今回は11月12、13の2日間鹿島槍スキー場をベースに北は白馬村との境から西は旧美麻村の大部分を含む範囲で大会は開催された。私への依頼は、安全管理部門を担当するスタッフを6名紹介してほしいということだった。そこで大町市付近の山仲間を中心に長山協の仲間に声をかけて参加した。大会の内容と総括がOMMのＨＰにアップされているので、興味のある方はそちらを参照されたい。

ここで私が述べたいのは、この大会のリスクマネジメントのことである。1000人規模の大会を取りまわすのに、スタッフは全体でもおよそ50人。僕の今までの常識からいうとかなり心配であったが、それはある意味杞憂であった。安全管理部門の全体の統括は、村越さんが担当され、安全管理マニュアルを作成し、我々はそれにのっとった形での協力となった。ここ数年村越さんは、もともと造形の深い読図を基本に、山でのリスクマネジメントにかかわって積極的に発言されているが、今回の安全マニュアルはその発想に基づいた極めて緻密に練られたものであった。その目次を別に示した。

もちろんマニュアルがあるからといって、事故がないわけではないし、何かあったときのためのアリバイのために作るわけでもない。要は、その大会がどういった趣旨の下で行われ、危機管理を含めスタッフがどういうコンセプトで対応するかが明確に方向づけられていることが重要であるということだ。これは登山における計画書ということになるが、はじめて参加する協議には素人の我々にとって、しなければならないことが明確に見えるマニュアルであった。

2日間地図を片手に2人1組で必携装備をもちながらの藪山歩き。「こんな大会なら、参加してみたい」そう思わせてくれるような楽しい大会だった。

Ⅰ　安全管理指針
Ⅱ　リスクアセスメント
　１．事前のリスクアセスメント
　２．イベント中のリスクアセスメントとリスク対応
　　２．１　リスクの変化についての概観
　　２．２　判定プロセス（２．２～２．３は①②について）
　　２．３　とりえるリスク回避・低減オプション
　　２．４　⑤（参加者の不適切な行動、装備不保持について）
Ⅲ　安全管理セクション　運営要領
　１．基本的な考え方（Ⅰ指針再掲）
　２．安全管理本部（マネージャー）の任務
　３．マーシャルの任務
　４．緊急時の対応
付録　競技規則・必須装備